
子犬が我が家にやって来たっ!!

日野五十鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子犬が我が家にやって来たっ！！

【Nコード】

N9705J

【作者名】

日野五十鈴

【あらすじ】

捨てられていた子犬を拾ってみると、なんと翌朝人間（獣耳・尻尾つき）になっていたっ！！ しかも拾い主に向かって『愛してる』とか言ってくるし…なにこれ、逆シヨタ…？ 抱腹絶倒ホームドラマ、ここに誕生…！！

【12話完結シリーズ第2段…！】

子犬が我が家にやって来たっ！！（1）

清々しい日曜の朝。

少年が目を覚ますと、見知らぬ男の子がベッドに座っていた。

「……………な…っ!？」

「俊^{しゅん}さん？」

「おっ、お前…誰!？」

少年…俊は掛け布団をはね除けてピシッと指差した。

「僕です。昨日命を救っていただいた捨て犬です」

「……………へ?」

俊はワケが分からなかった。

落ち着け自分。確かに昨日、自分は捨てられていた子犬を拾った。牛乳を飲ませて風呂に入れてやり、寒いだろうと思って一緒に布団で寝た。

まさか、あの。

「あの…子犬!？」

「はい。なぜだか僕にも分からないんですけど、朝起きたらこの姿に」

犬耳つき、尻尾つき。

(尻尾…めっちゃくちや振ってるし…)

元子犬は嬉しそうに尻尾を振っていた。

「俊さん…」

「は、ハイ」

元子犬は俊にタツクルしてきた。

「助けていただいて、ありがとうございます！ 大好きですっ！」

「ぎゃあああああああ!！」

小さな体からは想像できないような怪力で押し倒されてしまう。

俊と元子犬がベッドの上ですったもんだしているとき、俊の母親が入ってきた。

ノックもせず、いきなり。

「日曜の朝から何やってるの？ しゅ…キャー!！」

俊ママは持っていたおたまをカランと落とした。

俊はパジャマ姿で、元子犬は全裸なのだ。

「あ、いや、その、あの」

「かわいいー」

「へ？」

俊ママは元子犬に抱きついた。

「もう。お友達が来てるなら、ママに一言くらい言えばいいのに。なんで内緒に…ハッ、まさか！」

ママ上様、語尾の声音が変わってます。

「いやいやいや変な誤解しないで。俺はシヨタコンでもロリコンでもないし、男に興味はないから」

「でもその子かわいーじゃない。可愛ければ幼児でも男の子でもいと思っただんじゃないの？ 俊が、俊がとうとう犯罪を」

俊ママは大勘違いのもと号泣していた。

「ジーザスっ！！」

日曜の朝っぱらから、高見沢家では家族会議が開かれた。たかみざわ

といつても家長である父親は単身赴任中のため、俊ママと向かい合わせに俊と元子犬が座る形になった。

ちなみに元子犬は全裸というのもビジュアル的に障りがあるので、とりあえず俊のTシャツを着て会議にのぞんでいる。

「どういふことなの俊。説明しなさい」

「俺にも分からないんだよ。昨日連れてきた子犬が、朝起きたらコイツに化けてたんだってば」

「そんなファンタジーみたいなことが起こるわけないじゃない」

「ファンタジーって…」

むしろフィクションだろ、と俊は思った。

「ほら、お前も何か言えよ」

「僕は俊さんを愛してます」

「誰がそんなことを言えつつあった！」

元子犬はこれまでの経緯を事細かに話した。

生まれてすぐ母親から引き離されて、ダンボールに入れられて捨てられたこと。

風雨に曝されながら、空腹にも耐えて声の限りに泣き叫び続けたこと。

それでも誰も拾ってくれなくて、生きる気力を失いかけたこと。

そこに俊と出逢ったこと。

俊は自分にミルクを与え、汚れた身体を洗ってくれ、一緒に寝てくれたこと。

朝、目が覚めたらこの姿になっていたこと。

大体、元子犬はそんなことを話した。

元子犬が話し終える頃には、俊ママの目に涙の膜が張っていた。

「…そうだったの…まだ小さいのに、よく頑張ったわね…偉いわ」

俊ママはガシッと元子犬の二の腕を掴むと、力強く宣言した。

「任せといて。この高見沢家にいる間は、貴方に不自由させないと約束するわ！」

「えっ？ い、いいのかよ飼っても」

「飼うんじゃないくて居候よ！」

すっかり人間扱いだ。

「貴方、名前は？」

「分かりません…」

捨てられる以前はあった気がするが、覚えてないと元子犬は言う。

「そうねえ、じゃあ…シヨウタロウ…正太郎なんてどうかしら。高見沢正太郎。うん、我ながらバツチリ」

「ダメだろそんな爺くさいの…」

「正太郎…すごく素敵です！ 素敵な名前をつけてもらって、僕、嬉しいです！」

「うええっ!?!」

嘘だろ!?! と内心思ったが、尻尾を見る限りご機嫌だ。どうやら本当に気に入ったらしい。

「正ちゃん…可愛いっ」

俊ママは正太郎と名付けた元子犬に抱きついた。

「お袋、そんな正太郎に抱きつくなよ。変態扱いされるぞ」

「いいもーん。私、シヨタコンだもーん」

「シヨタコン、って…」

「正太郎コンプレックス、略してシヨタコン。いつか流行り言葉になるよ？」

ママ上様、シヨタコンという言葉はすでにあります。しかも貴女が仰った『正太郎コンプレックス』の略そのままです。

「うーんでも、いつまでも俊のダサイTシャツってわけにいかないわよねー」

「ダサくて悪かったなっ」

「任せといて！あとでママが正ちゃんにぶりちーな服買ってきてあげるから」

俊ママはそう言い残して、3人分の朝食を作るべく台所へとすっ飛んでった。

「俊さん…」

「な、なに」

正太郎は昔の某CMのチワワのごとく俊を見つめてきた。

と、隣に座っていた俊に抱きついてくる。

「これからよろしく願います！ 大好きですっ！」

「ぎゃあああああああ！！！」

俊は椅子ごと倒れながら思った。

これってアレか！？ いわゆるヤンデレってやつか！？ 相手が相手だから命を落とすことはなさそうだが、別の何かを失いそうだ。

積極的な正太郎は、頬擦りして頬っぺにチューまでしてくる。

「神様…助けて…」

そして俊は力尽きた。

子犬が我が家にやって来たっ！！（2）

俊ママがルンルンとブティックから帰ってきた。

「ちょうど子供服が安かったからさ」

怖いくらいに上機嫌だ。

俊ママは買ってきた服を多々着替えさせて、嬉々として着せ替えを楽しんでいる。

「お袋そんなに正太郎を…ぎゃあああああ!？」

俊は文字通りピョンと飛び上がって3メートルくらい後ずさった。

「なによ俊、大声出して…」

「だって、だってス、ス、スカート…」

正太郎が着ているそれは、紛れもなくスカートだった…。

「なんでスカート!？」

「あらなあに？ その言い分。男尊女卑はダメよ」

「そんなこと言ってるんじゃないねえ！ 正太郎は雄！ そうオス!!！」

可愛い外見に騙されがちだが、正太郎は正真正銘の男の子だ。

だのに、決して長くはないが短くもない髪をツインテールに縛り、絵本でしか見ないようなフリフリのエプロンドレスに着替えさせられていた。

「すごく素敵です！　素敵な服を用意していただいて、僕、嬉しいです！　お母さん」

「満足するな！　でもって、他人の母親をお母さん呼ばわりするなあ！！」

「やーねえ妬いてるの？　俊」

「違うわボケっ！」

元子犬と義兄弟なんて死んでもごめんだ。

「だって、ズボンじゃ尻尾が邪魔になるかもと思ってえ」

「あ……」

なるほど、と俊は思った。

確かにあの尻尾を収納するスペースは、長ズボンにも半ズボンにもないだろう。もちろん、ミニスカートにもないけど。穴を開けて自由にするという手もあるが、それじゃまるでちびっこコスプレイヤーだ。

もっともロングのエプロンドレスを着てる時点で、コスプレの第一

歩は踏んでるだろうが…。

「あとは帽子をのっけて…はい、できた　んまあ、かわいいー」

これまた漫画でしか見ないような大きなストローハット。しかもマーガレットを巨大化させたような、変な花飾り付き。

というわけで正太郎はエプロンドレスに麦わら帽子という、季節感の欠片もない姿に変身させられてしまった。それ以前に、男の子でしょ？　正太郎は。

「俊さん、似合いますか？」

俊は嘘をつかなかった。

「…似合うか似合わないかでいうなら似合ってる…」

「…俊さん…」

「…な、何…」

正太郎は俊に抱きついた。

もとい、襲いかかった。

「そう言ってくれて嬉しいです！大好きです！」

「ぎゃあああああああー！」

俊は廊下に押し倒されてしまった。

「あらあら正ちゃん、そんなに俊にはかりなついて」

「なつくってレベルかこれっ!？ 助けてくれ、喰われる…っ」

「これで公園デビューの準備はバッチリね」

正太郎と俊の動きが止まった。

「ここ、公園デビュー?」「」

2人同時に異口同音。

公園デビューと一口に言っても、色々なデビューの仕方がある。

赤ちゃんとママさん達。

赤ちゃんとパパさん達。

定年退職したオッサン達。

そして。

「ワンちゃんと愛犬家たち…ということでもいいのかな」

「嬉しいですー。俊さんと公園デートできるなんて」

「妄想カタカナ変換するなー！」

ロンスカの中で全く見えないが、尻尾は間違いなくフリフリだろう。

「まあいいや…正太郎、どの子とお友達になりたい？」

「そうですねー…あ、あの人！」

正太郎が指差したのは、ピンクの首輪を着けた真っ白なチワワ。

「おねーさん！」

を、連れている女の子だった。

なにい！？

「ちよっ、正太郎。知らない人に勝手についてっちやいけな…あれ？」

「あ、俊」

その女の子は、幼馴染みでクラスメイトの坂崎さかさきコウだった。

「コウ……」

「わー。ヤな偶然。よりもよって、あんなんかに出会うなんて……その子は？」

俊は傍目にも明らかに目を泳がせた。

「……ああ……俺ん家の……居候……。……」

「名前は？」

「……正太郎……」

「正太郎？」

（しまったー！）

エプロンドレス姿だったのを忘れてたな、俊。

「ふーん……あんたがこーゆー趣味だったとはねー」

「これは俺の趣味じゃない！」

「あー、この子に触っても構いませんか？」

「コウはニッコリと頷いた。

「いいわよ。よかったら撫でてやって。とても大人しいから」

大人しいチワワというのも珍しいが。

コウに言われて、正太郎はちょっと躊躇いながら手を伸ばしてみる。

首のあたりを撫でてやると、チワワは心地よさそうに目を閉じた。

「本当に大人しいんですね…。名前は何ていうんですか？」

「チビっていつの」

チビちゃん、と呼んでやると、目を閉じたまま手に耳の下を擦り付けるようにする。

「噛んだりしませんか？」

「大丈夫よ」

「偉いんですね」

と、その時。いきなり突風が吹いてきた。

それが正太郎の麦わら帽子を宙に飛ばす。

帽子の中から現れたのは…。

「あら…耳？」

そう、犬耳。俊は思わずゲツと呻いた。

コウはしゃがんで正太郎と同じ高さにまでなつて、興味津々に犬耳を弄り始めた。

「この耳…本物だわ！」

「いや、あの、その」

「じゃあ正太郎ちゃんのお父さんって…犬？」

白戸家じゃないんだから。

「あ、あのなコウ。話せば長いことになるけどな、正太郎はもともと捨て犬だったんだよ」

「あ、あんたに訊いてるんじゃないで、正太郎ちゃんに訊いてるの！…もういい」

そう言つてコウはプイツと帰つてしまった。

正太郎は帽子をかぶりなおすと、俊の袖をちょいちょいと引っ張つた。

「ああいつの、ツンデレっていうんですよね？」

「え？ いや、あれはツンデレとは違うと思うぞ。…ていうか誰にそんな言葉を習つた！」

「捨て犬だった頃、誰かが言つてました」

俊はガクツと肩を落とした。

「でも俊さんはコウさんに渡しません！ 僕は俊さんが大好きなんです！」

「ぎゃああああああ！」

俊は正太郎に大衆の面前で押し倒されてしまった。周囲の目が冷たいぞ。

「…オーマイガッ…」

そして、力尽きた。

子犬が我が家にやって来たっ！！（3）

「いいか、俺が学校に行ってる間、大人しくしてろよ。余計なことすんなよ。分かったか」

「はい。分かりました」

正太郎は尻尾をフリフリそう答える。素直なところがこいつのいいところだ。

「…俊さん…」

「…まさか…」

正太郎は昔の某CMのチワワのごとく目を潤ませると、俊の首に抱きついてきた。

「とつても寂しいですけど、僕、耐えてみせます！ 大好きですっ
「！」

「ぎゃあああああー！！」

またしても廊下に押し倒されてしまう。それも早朝から。

「俊いつまで…あらあら、正ちゃんったらまた俊にじゃれついて。俊、遊んでると遅刻するわよ」

「そう思うなら助けてくれ！ 喰われるー！！」

なんとか正太郎の魔手から逃れた俊は、元氣なく自転車を走らせていた。

中堅どころの公立高校在籍で、その中でも成績はいたってフツという、面白味も何もない俊は、元氣なく自転車を走らせているゆえにクラスメイトに追い付かれてしまう。

「おはよ。俊」

ぶつきらぼうに挨拶してきたのは昨日会った坂崎コウだ。

「おはよう」

「あれ？ 正太郎ちゃんは？」

「学校に連れていけるわけないだろー！？ 家に置いてきた」

言うと、つまんなそうな声でコウは呟いた。

「なーんだ。せつかく正太郎ちゃんと進展があつたのか期待してたのに」

何を！？ ねえ、ナニを！？ と俊は心中狼狽えた。

「てことは、てことはー、他の子とも進展する可能性があるってことよね！ ハッ、べ、別にアンタとの進展を望んでるわけじゃないからねっ」

だから、何を!?

しかしこの娘は、俊のことを好きなのか嫌いなのか。嫌いならさっさと自分ひとりだけ、先に教室に行ってしまう方がいいのに。

一緒に登校することが多いゆえに、2人並んで教室のドアを開けると当然のように冷やかされる。

「おつ、高見沢『夫妻』が入ってきたぞ〜」

口笛付き。

俊もすでに慣れてしまい、抗議することもない。

だがコウだけはいつもと違った。

「みんな、違うわよっ!」

え? と俊は振り返る。

「俊は正太郎ちゃんていう、可愛い男の子と同棲してるんだからねっ!」

心なしか周囲の目が冷たく感じた。

「ち、ち、ち、違う違う、ちっがーう! 俺と正太郎は決してそんな仲じゃな〜い!」

一緒に住んでいるというところは合ってはいるが。

俊は部活が終わるとすぐに帰った。

今日1日『超年下美少年と、あんなことやこんなことを!』という目線にさらされた苦痛もあるが、それ以上に正太郎が何かやらかってないか心配だったのだ。

そして案の定、それは的中した。

「ただい…ぎゃあああああああ!？」

「あ、お帰りなさい。俊さん」

俊は自分の部屋に帰るなり、絶叫した。

なぜだか分からないが、正太郎が本に埋もれていたのだ。しかもその本というのが…。

「なんでお前がエロ本なんざ見てんだよ!!!」

「俊さんがどのようなモノを好むのか、僕には知る権利があります
！」

毅然とした眼差しで言われたが、両手にエロ本では納得いかない。
せっかくベッドの下に隠しておいたのに。

正太郎は耳を垂れ、尻尾も元気なく垂れ下がった。

「でも人間の女性の裸ばかりで、何が面白いのかサツパリ分かりま
せん」

「あつたりめーだ！ でもって、10歳以下がそんな卑猥な本を読
むなあー！！」

今度はもつと複雑な場所に隠しておかないとな、と俊は思った。仏
壇の裏とか。バチが当たるぞ、俊。

子犬が我が家にやって来たっ！！（４）

この世において息子の気持ちとしては、部屋に隠してあるアダルトな雑誌を母親に見えられたくないものである。

しかし俊は正太郎に片っ端から読み漁られ、あと一步で母親にチクられるという最悪の結果を招きそうになった。

自分の部屋に正太郎を置いておくことを危惧した俊は、学校にいた間だけ、近所に住んでいるイトコに正太郎を預けることにした。

「じゃあ、こいつを頼むわ」

「任しとき」

彼は一番年上のイトコで、親が経営していたレンタルビデオショップ（DVDも好評レンタル中）を切り盛りしている。ちなみに独り暮らしで、彼女もいない。

早朝に俊がイトコの家を訪れて細かな事情を話すと、俊イトコは快く承諾してくれた。そして正太郎の尻尾を弄んだ。

「この尻尾…マジで本物だな！」

「やん。いきなり何するんですかあっ」

妙に色つばい声をあげながら、正太郎は俊イトコの手から逃れた。

「じゃ夕方に迎えに来るからな。それまで大人しくしてるんだぞ、正太郎」

「…俊さん…」

「な、んだよ」

正太郎は俊に飛び付こうとした。

「必ず迎えに来てくださいね！ 大好きで…」

「その手にはのらん」

飛び付こうとして、よけられた。ズザザザッと見事なヘッドスライディング。

「いつ…たああい…」

「自業自得だ」

正太郎はべそべそと涙をぬぐった。

「あらら可哀想に。ちっちゃい子供泣かしてるヒマがあったら、俊、早く学校行け。遅刻するぞ」

「ホントだ！ やつべ」

俊は脇目もふらず自転車をすっ飛ばした。

今日も今日とて『超年下美少年と、あんなことやこんなことを!』
視線にさらされてる俊が机に突っ伏してると、頭をちょんちょんと
つつかれた。

「おーい、生きてるかー高見沢」

声をかけてくれたのは部活仲間で隣のクラス、かなりのイケメンさ
んで名を馳せている賢治けんじだった。

「桜井さくらい…」

俊はへらへらと笑ってみせると、次の瞬間、賢治においおい泣
きついた。

「お、おい大丈夫かよ高見沢」

「聞・い・て・く・れ・よ」。実は土曜日に拾った子犬がな？ 俺
のテソーを狙ってるんだよお」

賢治は目を点にした。

「……………は？」

「だから子犬が人間に化けて、あろうことが俺のことを大好きデスとか言ってくるんだよ」

「なに言ってるんだよ。お前、大丈夫か？」

「大丈夫なわけないだろー!？」

おいおい泣く俊の背中を、賢治は優しく撫で撫でする。

「…分かった。じゃあ放課後にお前んち行くわ。その“人間に化けた子犬”もいるんだろ？」

キーンコーンカーンコーン。

「じゃ、また後でな」

賢治は肩をしっかりと叩いてから教室を去った。半分励ますように。半分俊の頭を案ずるように。

部活が終わると、俊はマツハで俊イトコのもとへ向かった。大勘違
いも甚だしい噂と視線に耐えきれなくなったこともあるのだが。

なにか…このまま長く置いておくと、取り返しのつかない事態にな
りそうだったから。

はたして、それは的中した。

「迎えに来てやったぞ正…ぎゃあああああ!？」

「お帰りなさい! お帰りなさい俊さん!!」

別件で頭が一杯で油断していた俊は、正太郎に抱きつかれて尻餅を
ついた。

「しょ、正太郎っ、ちゃんといい子にしてたか？」

「はいっ。今日は大人しくアニメを見させていただきました!」

「へーえ」

さすがビデオ屋なだけある。

「一体どんなアニ…」

正太郎の手にしているビデオテープを見た瞬間、思考がフリーズし
た。

(……………。……………。…ん？…アニメって、18禁じゃねえか！？
しかも)

BL。男と男の恋愛模様。

「俊さあん」

正太郎はアダっばい目付きをして上半身をクネクネさせた。

「これで俊さんがお望みの時は、いつでもこの身を捧げられますう。
口でも菊「わーわーわー!!」」

ここは全年齢対象だから！ ていうかアニメで覚えたのかそのいか
がわしい単語は!!

「とにかく、どのようなご要望にもお応えします。 あっはんうっふ
んです」

「……………」

俊は硬直した。 そっちの趣味がある人ならKOされていそうな美少
年だ。

が、嗜好もごく普通な高校生男子である俊は、イトコのもとへすっ
飛んでいった。

「貴様が正太郎に卑猥ビデオ見せやがったのはア!!」

「だって正太郎くん俊のこと愛してるって言うからアアアアアアア

「!」

その後、俊イトコが散々ボコられたのは言つまでもない。

子犬が我が家にやって来たっ！！（5）

トボトボと家に帰ると、俊ママが菜箸を持って出迎えてくれた。

「ただいま」

「お帰りなさい。お友達が来てるわよ」

来訪者は賢治だった。

「よお高見沢。約束どおり来てやったぜ」

「桜井……」

「そいつがその“人間に化けた”わんこ？」

そいつ、のところで賢治は正太郎を指差した。失礼だよ、コイツ。

「まあ、そんなとこ」

「名前きまったの？」

「……正太郎……」

「正太郎？」

ガーリツシュな格好に騙されてはいけない。

俊が正太郎の帽子をとると、そこから現れたものに賢治は興味を示す。

「…耳？」

ピクピク動く耳を賢治はイジイジする。

「この耳…本物じゃん！」

次にスカートの下でバフバフ動いてた尻尾をイジイジ。

「…この尻尾も本物…」

賢治はペタペタと正太郎のあちこちを触りまくった。

俊はビミョーな顔をした。

「お前はなんだ、変態か」

「こんなの見られるの人生で1度きりかもしれないんだから、やれることやっとかないと」

そうやって今度は正太郎の服を脱がそうとするので、さすがの正太郎も『やん』と言って賢治の手から逃れた。

「僕は俊さんだけのものなんです。おにーちゃんなんかは僕の貞操は捧げません！」

「いつからお前は俺の所有物になったー！？ あと貞操はいらねー

下が猛烈な匂いだとか。同級生にモテモテなくせして、その実か
りの熟女好きとか。

しかし実際に問題があったのは、熟女好きでもロリコンでもなく、
正太郎コンプレックス略してシヨタコンだったのだ。

「やだな〜高見沢、俺はお前のことは友達としか見てねーよ」

「ったりめーだボケエ!!!」

「俺は小学生以上高校生未満にしか興味ねーよ〜」

男好きのうえに、子供好き。

俊は今まで彼と友達だったことを恥じた。いつそ自分で穴を掘って、
その中に生き埋めになりたい。

「しかし本当に犬が人間になるとはね〜」

賢治は言いながら正太郎の頬つぺたをプニプニしている。

「なんか変なものでも食べた？」

「いえ、ミルク貰っただけです」

プニプニプニプニ。

「やつ、やめろ桜井！ 正太郎に無闇に手出しするなっ」

いつターゲットを賢治に変えて襲ってくるとも限らない。

子犬が我が家にやって来たっ！！（6）

あれから諸々あり、俊が教室の机で頭を抱えて現実逃避していると、後ろから髪の毛を思い切り引っ張られた。

「いででででででで！！」

「なーに人生の終わりみたいな悲壮感漂わせてるのよ」

「コウ…」

「な、べっ、べつにアンタが心配で声かけたんじゃないんだからね
！」

幼馴染みの登場に、俊は少し涙ぐんだ。

「聞いてくれよ。あのな、桜井がな」

「桜井って、C組の桜井くん？」

「そつだよ。あと正太郎が…」

キンコンカンコンコン。

ホームルームを告げるチャイムが鳴った。

「じゃ、じゃあまた後だねっ」

コウは席に戻った。

「転校生を紹介します。入ってきなさい」

担任が言うと、金髪の子が教室に入ってきた。

「はじめまして。高橋メリー＝アンです。よろしくお願ひします」

すぐるような瞳と、風に揺れる長い髪。

どこかで聞いたことがあるような気がしてならない転校生の、ときめく出逢いに俊は思った。

(胸…はち切れそう…)

死語だと分かっている。でも書かせてくれ。

ポインだ（死語）。

ボンキュツボンだ（ド死語）。

「高橋の席は、窓際の高見沢の隣だ」

「はい」

そして魅惑的な肉体が俊の隣に…。

「よろしくお願いしまーす」

「あ。ハイ、こちらこそ…。」

コウの視線が冷たいぞ。先が思いやられるな、俊。

「高橋さんってさー、どこの国から来たの？」

「どうぞメリアンと呼んでください。アメリカのカリフォルニアから来ましたー。日系ハーフです」

休み時間早々、コウがメリアンに声をかける。

「あのだ、コウ。俺もまぜてくれよー」

「なに言ってるの！ 女子には女子だけの話があるの。ね？ メリアン」

「そうですね。それにワタシ、男のヒト怖いです」

「男が怖い？」

メリアンは自分の肩を抱きながらブルブル震えた。

「チカンとかイタズラとか色々されまーす。あれ、嫌です」

「ああ……」

なるほどね、と俊は呟いた。

金髪、豊満な肉体、膝上20cmのスカート丈。

男からすればもうこれは犯罪レベルに扇情的だ。アブナイ人なら手出しせずにはいられない。

「じゃ、メリアンは男の人に興味ないの？」

「全くというわけではありませんが、どちらかというところ、そうですねー」

「じゃ、どづいづのがタイプなわけ？」

メリアンは窓に目をやると、あ、と声を出して指差した。

「あんなコがいいです」

そこには10歳前後の、ギャザースカートをはいて帽子を被った幼児が歩いていった。

………つて！

「正太郎!？」

俊がベランダに出ると、正太郎は満面の笑みを浮かべて駆け寄ってきた（彼のクラスは1階にある）。

「俊さん！」

「お前どっから入ってきたんだよ!？」

「裏門が開いてました」

俊はガクツと肩を落とした。ちゃんと閉めとけよ、防犯上大問題だろ。

「シヨータローちゃんっていうんですかー？」

「あ、ああ」

メリアンは俊から正太郎を奪い取って抱き寄せた。

「Oh! So cute!! お嬢ちゃん、カワイイです」

……。……。……。また？

「メリアン…あなた、そっちだったの？」

「そうです。何かおかしいですかー？」

さすが自由の国アメリカ合衆国、まさにフリーダム！

こんなパーフェクトな外国人がいるとは、俊もつくづく思ってたな。美人のうえにスタイルもよく、日本語ペラペラで洒落も通じる。

こんな外人がいてはならないはずだ。俊はなんとなく思っていた。

彼女の汚点はどこにあるのだろう。実は金髪は単なるカラーで、本当は日本の田舎生まれとか。実は整形美女で元の顔が朝 龍みたいだとか。痴漢や変態を毛嫌いしながら、その実かなりのオッサン好きとか。

しかし実際に問題があったのは、オッサンラブでもシヨタコンでもなく、ロリータコンプレックス略してロリコンだったのだ。

いけないことを知ってしまった。10秒後からどういう顔して会えというのだ。

(桜井2号!!)

「あ…あのさメリアン、そいつは元を辿れば犬でオス…」

「その子、俊の恋人なんだよ」

「違うわボケっ!!」

正太郎を抱き締めていた腕がほどけた。

「What? この子がオス犬!? まさか…」

メリアンは正太郎のギャザースカートを捲りあげた。

「……、…オーマイ…」

そして、倒れた。

「“ゴッド”を呑み込んだ!？」

「「シツ」ミビゴるはそこじゃないでしょ! しっかりしてメリアン
」!

「…あの子…男の子でしたね…しかも尻尾ついてたね…」

謔言のようにブツブツ言うメリアン。

「…俊さん…」

「…な、何…」

正太郎は俊の胸にタツクルしてきた。

「コウさんにも恋人と認められて、僕、嬉しいです！ 愛してます
一生離しません！」

「ぎゃああああああ！！」

「ほら、言ったとおりでしょ？」

「やめるコウ！ 公衆の面前で恥ずかしい説明いれるんじゃないか！
！あと見てないで、助け…っ！」

時すでに遅し、クラスメイトにはロリコンのレッテルを貼られてい
た。シヨタコンじゃないだけましか？

「…おお…神よ…」

翌日、隣席のメリアンからは『俊と私は同じ趣味ですねー』と嬉々
と一言言われることになる。

子犬が我が家にやって来たっ！！（7）

俊は父親が大嫌いだった。

（どうして俺の親父はこんなにカッコ悪いんだろう）

シャツとかトレーナーとかズボンの中に入れてるし。

（…冷え性か、お前は）

財布を握る妻に騙されて月2万円のお小遣いで納得しちゃうし。

（…今まで週5000円だったんなら同じだろうが）

ピン芸人も波 陽区と小 よしおしか知らないし。

（…とつくに一発屋で終わってんだけど。それともへ サゴンで知ったのか？）

息子が見ている前でさえ俊パパはダサくて、ちょっと他人の親を意識すれば自然と見比べ、さらにそのマヌケっぷりに磨きがかかる始末。

俊はそんな父親が大嫌いだった。

大嫌いだ大嫌いだ大嫌いだ…そう言ってるのに。

『DEAR 拝啓親愛なるママと俊へ。』

みんな元気にしてるかな？ 僕は三畳一間の小さな社宅でこのメールを打ってるけど、来週には仕事も落ち着いて、久々にそっちにかえれそうだ世。

ママと俊の喜ぶ顔が早く見たい菜。

ああそれと、ママから聞いたんだけど、なんでも居候のプリチーな子がいるらしいじゃないか。

いいぞいいぞ！ 一家の大根柱がそう言ってるんだ。居候の1人や2人、どーんと我が家に迎えなさい！

その子と会うのも楽しみだ

じゃあ、お土産もって帰ってくるから楽しみにして待ってるんだ世。

FROM パパより かしこ『』

… 1週間前、俊パパからこのようなメールが届いた。

意味不明な構成と認めたくない内容に、俊が現実を受け入れるまで数秒を費やした。

(つてかDEAR拝啓親愛なるつて何!? DEARも拝啓も親愛なるも重複してんじゃん。あと大根柱じゃなくて大黒柱だろ!? それに居候そんなに抱え込めねーよ!あとFROMパパより、かしこつて! より要らねーよパパで切れよ、それと『かしこ』は女性限定の言葉だろ!!)

俊は心の中で一通り突っ込んだ。

それだけでかなり疲れたので、俊はあと1つだけ心の中で突っ込んだ。

(…世とか菜つて…とうとう“2ちゃん”にまで手を出したな…)

何かと寂しい単身赴任なのでした。

そして俊パパの手により玄関の扉が開かれる。

「ただいま愛しの俊…」

「その手にはのらん」

愛息子を抱き締めようとした両腕は空を抱き、玄関でつんのめった俊パパは玄関マットにゴンッ！と頭をぶつけた。

紙袋からお土産が散乱する。

その様子を見ていた正太郎は、狂喜乱舞して俊に飛び付こうとした。

「パパさんの抱擁さえ退けるなんて！ やっぱり僕の大好きな俊さんです！ 愛してま…」

「その手にももらん」

正太郎も寸でのところで俊にかわされ、俊パパの上にベチャツと潰れるようにして倒れた。

「うーん。ちょっとどいてくれないかなあ」

「あつ！ ごめんなさい、お父さん」

「他人の父親を“お父さん”呼ばわりするな」

正太郎が俊パパの頭の方へどくと、俊パパは正太郎の桜色のワンピースをパタパタとはたいてやった。俊ママが今日のためにと、特別に選んできたやつだ。

「やー、ホントだねえ。聞いてたとおり相当かわいいねー。でも女の子が自分のこと『僕』なんて言うのはどうかな？」

「僕、男の子ですよ」

…俊パパは目を点にした。

「…え…」

「もしかして僕のこと、女の子だと思ってたんですか？ ひどいですう！」

「そんな格好してるからだろ…」

「えっ！？ 嘘でしょ、だってこんな可愛げで…」

俊パパはうつ伏せなことをいいことに、正太郎のワンピースの中をこっそり覗いた。変態だ、変態。

「…うん…」

そして、ペチャツと潰れた。

「うわ大丈夫かよ親父」

「…確かに男の子だったね…しかも、変な尻尾付き…」

俊パパは正太郎の後ろにまわって、尻尾を引き抜こうとした。

「いつつ、痛いですよお父さん！」

「え？ この尻尾…本物!？」

まさかと思って正太郎の帽子も取ってみる。予想どおり中には犬耳が収納されていた。

「…耳の力チューシャ…だよね…？」

そして、これまた引っ張る。

「いつっ！」

「こ、これも本物お!？」

「あ…親父、話せば長くなるんだけどな…」

俊はこれまでの経緯を事細かに話した。

拾ってやった捨て犬が突然不完全な人間体になってたこと。それゆえ帽子をかぶり、スカートをはいて女装もしていること。俊ママが気に入ってしまったがために、高見沢家で居候していること。

そして何を思ったのか、この半獣少年は自分のことを『愛してる』とか言ってくること。

リビングでその事を話し終えるまでに、コーヒー一杯を飲み終えてしまった。

俊パパは腕を組むと、俊の隣にいる正太郎に目を遣った。

「…正太郎くん…といったね」

「は、はい…」

正太郎が息を呑むのと同時に、俊パパはくわつと叫んだ。

「いいか！ 男で幼児で犬な君なんぞに、愛する俊は簡単には渡さんからな！！」

正太郎は地獄の底を見たような顔をした。

一方で、俊は父親の意外すぎる宣言に少しだけ涙した。

「どうした、俊」

「いや…俺、初めていま親父のこと、すげーマトモな人だと思ったよ」

母親もコウも桜井もメリアンも、クラスメイトすら批判しなかったのに。

（ありがとう…親父）

今までマヌケだなんて思ってたでごめんなさい。

「そ、それならのぞむところですよ！」

え？

「パパさんが認めるまで、僕、絶対に諦めません！ 僕は本気で俊

さんを愛してるんです！ 簡単に降参などしませんっ！」

「ぎゃああああああ！！」

俊は横から抱きつかれて椅子ごと倒れてしまった。子供のくせにすごい怪力だから、本気で相対さないと冗談抜きで貞操が危ない。

「ほおおおおっ。なら、せいぜい頑張ってみるんだな。正太郎くん」

「んなこと言っていないで助けてくれっ。喰われるー！」

「はいつ。のぞむところですよー！」

正太郎は俊の服を脱がそうとしながら、キツと俊パパを見据えたのだった。

子犬が我が家にやって来たっ！！（8）

絵のモデルになってくれるよう頼まれたら、誰だって少しは躊躇する。

しかもそれが裸婦ならぬ裸オトコなら、躊躇は少しばかりでは済まない。というか絶対にお断りだ。

もちろん俊も断った。そして正太郎の純真なを傷つけぬよう、やはりと辞退した。

ところが描き手も心得たもので、今がイチバン脂のノっている時期だからとか（デブってるといふ意味ではない）、若くて綺麗なうち（に絵画として残しておこうとか（どこで覚えたんだそんな口説き方を）、アイドルを脱がせちゃうカメラマンみたいに言葉の限りを尽くして説得してくる。

俊の方も断るのにだんだんめんどくさくなってきて、上半身だけの条件付きで承諾してしまった。

「だったら部活の基礎連で鍛え上げた肉体を、グラビアならぬクレヨンで残すのもいいかもなと思ったただけなのにーっ」

「逃げないでください俊さん！ オトコらしくないですよ！」

正太郎の投げたクレヨンが俊の頭に命中した。

「いつ！？ てえ…何すんだよ正太郎！」

「もう少しで完成するんですから、ベッドにおとなしく座っていてください」

幼児（・犬）に語気強く言われてしまい、俊は大人しくベッドに戻った。下にはジーンズを穿いていて、ポーズ的にはかの有名な『考える人』だ。

初めて使うお絵描きセット。つい数カ月前までわんこだった少年の処女作。事の発端は父の土産（すでに単身赴任先に帰ったが）の中に、12色クレヨンが入っていたことだった。

『正太郎くんを買ってきたんだよ。小さな居候がいるって聞いてたから』

これを殊の他正太郎が気に入ってしまい、クレヨンの使い方を教えたその翌日、俊（の裸）を描きたいと言い出したのだった。

「できましたー！」

完成したようだ。

「ほおおおおっ、どれどれ……」

このとき、俊はさほど出来映えに興味はなかった。初めて使ったお絵描きセットなのだ。スプーンに顔が描いてあるようなものだろう。まるかいてちよん、みたいな。

だが、正太郎の処女作を見た俊は絶句した。

「……………」

「……いかがですか俊さん……？」

「……………絵えうまつつ……！」

上手かった。

まるかいてちよん、なんてとんでもない。本当に12色クレヨンで描いたのか！？ というくらい、正太郎の絵はリアルで写実的だった。美術2の俊は降参するしかない。

「ありがとうございますー　俊さんに誉められて僕、嬉しいです
「！」

尻尾をちぎれんばかりに振っている。

「じゃあ次は俊さんの番ですね」

「はい？」

何が？ と訊くまでもなかった。正太郎はスケッチブックとクレヨンに俊に渡すと、いそいそと服を脱ぎ始めたのだ。

「ぎゃー正太郎！ 脱ぐな！ 脱がんでいいいいっ！！」

「俊、なにをそんなにギャーギャー騒…キヤー！？」

いきなり入ってきた俊ママは顔をひきつらせた。俊は上半身裸で正太郎は全裸なのだ。

「俊がー、正ちゃんがとうとうとうとうー」

「いやいやいや最悪の誤解はやメテ。俺も正太郎も“無傷”だから…って何言ってるんだ俺」

聞いているのかいないのか、俊ママはメソメソ泣いている。

「ほら正太郎、お前もなんか言えよ」

「お母さん、俊さんを僕にください」

「ますます誤解されるようなこというなあ…！」

だって、と今度は正太郎が涙目になった。

「僕は俊さんが大好きなんです。愛してるんです」

「き、気持ちはありがた迷惑だが…っつて、ぎゃああああ飛び付く
なああああ！！！」

部屋の前でしくしく泣いている俊ママ。

泣きながら全裸で首に絡み付いてくる正太郎。

2人同時には相手できなくて。

「…カミサマ…」

ぽてっと、力尽きた。

子犬が我が家にやって来たっ！！（9）

神様と聞いて、日本人は何を思い浮かべるだろうか。

天照大神（てんてるおおがみ、ではない）、大国主命（だいこくしゅいのち、ではない）、面倒くさいからまとめて七福神、キリシタンの人ならイエス・キリスト（彼って神様か？）。

いずれにせよ彼らは雲の上も上の存在、決して下界に降り立つことはないと思われている方々だ。

だがしかし、その『神』と名乗る者が真夜中、突然目の前に現れたら…。

そして俊と正太郎は今、その状況下に置かれていた。

「…あの、色々訊きたいことが山ほどあるんですけど。まず貴女は誰なんですか？」

「わたくし？ わたくしは神」

「はあ？ いきなり何なんですか。貴女おかしいですよ」

「おかしいのは貴方ですよ。あははマジつけるからあ」

「無表情のまままで笑わないでください！」

しかもなんで若者口調なんだ。

「この状況でそんなことを言うの？ わたくしを見れば分かるですよ。おかしいのはわたくしか、貴方か」

「……………」

認めたくはないが、確かに今、自分のいる状況は異常だ。

施設は完璧なはずなのに、しかも窓を壊された形跡もなく、なぜ彼女が立っているのか。

涼しげな表情からは、彼女がアレコレ試行錯誤して苦勞に苦勞を重ねて侵入したとは考えづらい。

そしてその格好。

仮にも冬の真夜中だと言うのにノースリーブ。そのくせ鳥肌も立っていない。背中には巨大な昆虫の薄羽があり、わざとらしく魔法のステッキじみたものをもっている。

こんな変な格好をして物取りに来たとは考えにくい。

「…まあいいや。じゃ質問その2。貴女は何しに来たんですか？」

「答えその2。わたくしはその元子犬を試しに来たのよ」

「はあ？」

正太郎を試しに？

「貴女になんの権限があつて…」

「だって、わたくしが彼をその姿にしたんだもの」

「ほえ？」

正太郎が間抜けな声を出した。眠いのもあるんだろうが、どうもその張本人が覚えていないというところが大きい。

「おねーさんが、僕を人間の姿にしたんですかー？」

「そうよ。それでも耳と尻尾だけ残したのは…正太郎、あなたを試したかったから」

「試す、つて…」

「貴方の恩人である高見沢俊を幸せにしてもらなさい。そしたら耳と尻尾もきちんとして、完全な人間の姿にしてあげるわ」

「…ピノキオみたいな話だな…」

「ちなみに幸せに出来なかった場合…」

神様は綺麗な笑顔でこう言った。

「犬に戻って保健所行きよ」

「うへえっ!？」

これには俊の方が怯えた。

(なんてハイリスクな試練なんだー!！)

「じゃあ、がんばってね」

神様はそれだけ言っと、幽霊のように消えていく。

結果、深夜の一室には何事もなかったかのように俊と正太郎が残された。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「…俊さん」

「…はい…」

正太郎は力強く言った。

「僕、絶対に俊さんを幸せにしてみせます!！」

「…ああそ…精々頑張っ…うへええええええ!？」

正太郎は俊をベッドに押し倒した。

「幸せになりましたよね！！ 水族館でおて繋いでデートして、それから指輪を渡してプロポーズして、結納、結婚といきますよー！ あ、でも新婚初夜は優しくお願いしますねー」

「そんな風にお前と幸せになんかなりたくない！！」

「式はー、神前よりもチャペルがいいですー！ 指輪の交換してー、近いのキスをしてー、んーっ、ぢゅっ」

「ギャーやめろねら！ ヒトの頬を吸引するんじゃないっ！！」

誰でもいいから助けてくれ！！

俊の心の叫びは、届かなかった。

子犬が我が家にやって来たっ！！（10）

あの夜（自称）神様が現れてから、正太郎は俊を『幸せにする』ために必死だった。

「あゝあ、今日も疲れ…だっ、誰!？」

掛け布団の中に誰かが潜んでいる。

思いきってめくると…。

「正太郎…こんなところで何してる!」

「何って」

犬耳も尻尾も隠さずに、正太郎は小さな四肢をバタバタさせた。ふりふりレースの夜着は俊ママが買い与えたものだ。

「夜這いです」

「夜這い!？ よ、夜這いというものはダな、男が相手の布団にこっさり…」

「あってるじゃないですか」

「あってるな…。違う違う、そうじゃ、そうじゃない!」

鈴 雅之風に俊は否定した。

「おおお男が女のお布団につ」

「俊さん任せにしておいたら、いつまで経っても僕は俊さんを幸せにできません！」

「今のままで充分幸せだからいいっ!!」

そう叫んでから、しまった! と俊は後悔した。

正太郎の大きな目いっぱい涙を浮かび、耳も尻尾もしょんぼりと垂れ下がる。

「…そうですね…僕なんかいなくても、俊さんは幸せなんですよね…」

正太郎は枕を持つと、ゆっくりとベッドから飛び降りた。

「分かりました…お邪魔してごめんなさい。僕は別のところで寝ます」

「ちよ、つと待てよ」

某ドラマのキ タク風に、俊は正太郎の後ろ姿に声を投げた。

「べつに俺の安眠さえ妨害しなければ…その…い、一緒の布団に寝てたっていい」

正太郎はパツと顔を明るくした。

「ほ、本当ですか！」

そして俊の腕を掴んで引き倒す。子供のくせに怪力だから、あつという間にシングルベッドの上だ。

「うわっ！」

「それなら、お言葉に甘えてお邪魔します」

正太郎は俊の腕を枕にし、満足そうに俊のパジャマのボタンを握った。

俊も抗議する気が失せて、やれやれと頭を撫でてやる。どっちがどっちを幸せにするのか分かったもんじやない。

「…俊さん…」

「…なに…？」

「俊さんがよく眠れるように、僕がお話かせてあげましょうか」

「…べつに」

「いらない、と言いかけて慌てて口をつぐんだ。また正太郎を失望させないように。」

正太郎はこのところナイーブになっている。俊を『幸せに』できれば晴れて完全な人間体に、できなければ犬に戻って保健所行きとなるからだ。

彼の行いが全てとはいえ、『幸も不幸も自分次第』を地でいく俊にとつては、もし正太郎が保健所行きとなつたらなんだか後ろめたい。もしかしたら彼の行いにひとつでも満足したら、保健所行きは免れるかも。

「…いいけど、面白い話にしてくれよな」

「はいっ。じゃあ『桃太郎』いきまーす」

アム・レイ風に正太郎は発進宣言した。

「昔々、あるところにお爺さんとお婆さんがいました。お爺さんは山へ芝刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました」

ふむふむ。

「お婆さんが川で洗濯をしていると、大きな桃がドンブラコ、ドンブラコと流れてきました。お婆さんはその大きな桃を拾うと、家に持って帰りました」

ふむふむ。

「お婆さんが桃を食べるとあら不思議、なんと娘に若返りました」

あれ？　なんかちょっと違うような…。

「芝刈りから帰ったお爺さんは、お婆さんが娘に化けたので飛び上がりました。お爺さんが半信半疑で桃を食べると、なんとお爺さんも若返りました」

なんか不吉な予感がするぞ。

「その晩、2人は激しく愛し「ストオーツプ!!」」

間一髪だったな、俊。

「どこで覚えたんだそのイカガワシイ異説・桃太郎は!!」

「俊さんが学校にいつてる間に、テレビで」

「嘘つけーっ！ 真っ昼間からそんなもんやってるわけねーだろー
!!」

やってても早くて夜の9時10時だろ!? と思ったところで俊の
眠気はすっかり覚めてしまった。

仕方ない。

こんなことはしたくなかったんだがと思いながら、俊は正太郎の上
に覆い被さった。

「…しゅ、俊さん…!!?」

「…おやすみ、正太郎」

そして額にキスしてやる。

「俊さ…!!? う〜ん…」

作戦は成功した。

お伽噺なんかじゃ頬を薔薇色に染めてお姫様が目覚めたりするが、
正太郎は全身を真っ赤にすると白目を剥いて気絶した。

俊はこれで安眠できると思った。

こんな調子で、はたして正太郎は完全な人間になれるのだろうか。

(やれやれだぜ…)

子犬が我が家にやって来たっ！！（11）

「あら」

と俊ママはリビングのテーブルに目を留めた。

そこには大判のハンカチで包んだ弁当箱が乗っている。

どうやら俊が弁当を忘れたようだ。

「俊ったら…しょうがないわね」

しかし、これからどうしようか。

連日の悪天候から、今日は久々に晴れたのだ。掃除もしたいし布団も干したい。山と積まれた洗濯物もどうにかしたい。だがそれでは俊に弁当を届けられない。

「そうだわ」

そして俊ママはすぐ近所にある高見沢家の親戚の店へと足を運んだ。ヒデオショップ

「うわー最悪だあー」

俊はカバンの中を見て己の失態に気付いた。

「どうした？ 高見沢」

ご飯を頬張りながら賢治が訊く。メリアンはコウと一緒にトイレに行ったため、隣の席にはC組から賢治が来て座っていた。

「弁当忘れた〜早弁できねえ〜」

「それは御愁傷様」

賢治の弁当箱から漂ってくるいい匂いに、俊の腹はぐ〜きゅるるる〜と鳴った。

「ちくしょー腹減った〜」

思春期真っ盛り、成長期の俊は早弁しないと昼までエネルギーがもたない。

「あ〜。昼までにお袋が気付いてくれるかなー」

とっくに気付いてるぞ、俊。だが母親が持ってくる可能性は低いな。

「じゃあ正ちゃん、ウチのバカ俊によろしくお願いね」

「はいつ!」

自分の息子の暴言を吐きながら、俊ママは弁当箱と帽子を正太郎の手と頭にぽんつとのせてやった。

一緒に『ポケツとモンスター』サトシとタケシの恋愛事情』なるビデオを見ていた(なんつーアニメを子供に見せてるんだ!) 俊イトコは、大丈夫かなあ、と呟いた。

初めてのおつかい。問題は学校まで昼までに到着するかどうかだ。俊でさえ高校へは自転車を通ってるのだ。子供の足で、昼までに、はたして着くのだろうか。

「学校の場所は分かるの?」

「はいつ。分かります!」

「じゃあ大丈夫ね」

(ホントかよ!?)

「頼んだわよ、正ちゃん！早く届けてあげないと、俊ったらHP(腹ペコの略ではない)尽きて凶悪モンスターにやられちゃうから」

「何でRPGみたいな説明なんですか叔母さん!?!」

「任せてください!」

そう胸を張って正太郎はてくてくと高校へと旅立っていった。

案の定、正太郎は迷子になった。

ただし、学校の敷地内で。

「俊さあくん、どこにいるんですかあ」

べそべそ泣いている正太郎に、道行く学生と教師は怪訝な顔をした。なんで幼女がここに!?! といった顔だ。

「君、誰を探してるの？」

ある教師が正太郎に話しかけてきた。

「…俊さん…」

「名字は？」

「…高見沢…」

うん、と教師は首を捻った。

「ちよつと僕には分からないなあ…ごめんね」

こうして何人かが正太郎に興味を持って話し掛けてくるのだが、高見沢俊の名前をあげると皆一様に分からないと言い去っていくのだ。生徒はともかく、先生は覚えるよ生徒の名前くらい。それかもしくは校内放送で俊を用務室か放送室に呼び出せよ。

「あら？」

聞き知った声だったので、正太郎は思わず振り返った。女子生徒がしゃがんで正太郎と同じ目線に合わせる。

「正太郎ちゃん…よね？」

正太郎は嬉しさのあまり尻尾を振りながら泣いてしまった。

「高見沢ー、面会だぞー」

ドアの一番近くにいた男子生徒が、パンを頼張る俊の名を呼んだ。

男子生徒はニカツと笑う。

「女の」

「…へ？」

するとそこに、正太郎の手を握ったコウとメリアンが入ってきた。

「コウ！？　なんでお前が正太郎と一緒に！？」

「このバカ俊！！　正太郎ちゃん泣いてるじゃない！」

「え？　それ俺のせいなの？　てゆうーかなんでコウが俺の飯食ってる場所知ってるの？」

俊は賢治のいる組で昼食をとっていた。

コウは真っ赤になった。

「べっ、べっにあんたに興味があったわけじゃなくて、自分のクラスにいないなら桜井くんの所かかって思っただけなんだからねっ」

メリアンが『俺のせいなの？』という部分の問いに答えた。

「正太郎ちゃん、俊のお弁当持って迷子になってましたー。だから連れてきたんでーす」

正太郎はトコトコ俊に近づくと、弁当を両手で持ち上げた。

「はい、俊さん。忘れ物です」

「…正太郎…」

俊はガラにもなくじーんときていた。

弁当を受けとる代わりに、まず俊は正太郎を強く抱き締めた。

「ごめんな正太郎…俺の弁当なんかのために…本当にありがとう」

「…俊さん…」

そして、お弁当タイムは期せずしてラブラブタイムになった。

「俊さん。僕、お腹空きました」

「え？ 仕方ねーなー。ほら、この卵焼きやるよ。あーん」

「ひゅーひゅー、お熱いねえお2人さん」

「1人だけ抜け駆けすんなよ、高見沢」

「男が男の子に『あーん』なんて、バツカみたい」

「Oh! では俊は正太郎ちゃんにI o v i n g .」

「だーから違うってーのおおおおお!」

賑やかな昼食会なのでした。

子犬が我が家にやって来たっ！！（12）

それは下校途中に起きた。

「俊さん」

「なに？」

「一緒に帰りましょう！」

「あー…悪いけどそら無理だわ。部活で遅くなるし…」

「じゃあ僕、部活が終わるまで、学校で待ってますね！」

ということでは正太郎は特別の計らいで、用務員室で俊の部活が終わるのを待つことになった。耳と尻尾がバレないことを祈る。

俊は母親に電話して、正太郎が学校にいる旨を伝えた。これでこっちは大丈夫。

俊が用務員室に正太郎を迎えに行く頃には、すでに午後5時をまわっていた。

「俊さん！」

「どうも、お世話になりました」

「いやいや。いい子にしてたよ、ねー?」

用務員の言葉にニツコリ笑う正太郎。可愛い外見に騙されてはいけない。

その後、友達は『正太郎がいるから…』と無駄な気を遣って早々に別れてしまい、俊はコンビ二前で正太郎と買い食いしていた。

そのときである。

「さあ、覚悟はいい? 正太郎」

と頭上から声がした。

ん?

頭上から…?

「ってうわあああ!?!」

「あ、おねーさん!」

ノースリーブに昆虫の羽根、正太郎を中途半端なヒト型にしたという(自称)神様が頭上から舞い降りた。

「…あのー、その姿は非常に目立ちやすいんで、どこか別の場所でゆっくり話しませんか」

「なに? わたくしをラブホに誘ってるわけ?」

「誘つかポケツ！」

神様にくわつとツッコむ俊。

「大丈夫よ。わたくしの姿は貴方と正太郎にしか見えてないから」

「あ。そーなんですか」

「さて、覚悟はいい？ 正太郎」

「…あのー…話が全く読めないんですが…」

はああ、と長くため息をついて、神様は魔法のステッキで正太郎をさした。

「だから正太郎に、犬に戻って保健所に行く準備は出来てるかって訊いてるのー！」

「ええ！？」

そういえば、もうそんな期限だと俊は思い出していた。

「さ。いつまでもスナック菓子たべてないで、心の準備するのよ」

「…あのー、なんで正太郎は犬に戻らないといけないんですか？」

「そんなの、いつまでも貴方のお荷物になってるからに決まってるじゃない。あはは、マジうけるからー」

「だからって無表情で笑うのはやめてください！ それとなんで若

者口調なんですか」

「和むでしょ？ さ、正太郎。覚悟はいいわね」

「う…い、嫌ですーっ！」

正太郎は俊にしがみついた。

「僕は人間として俊さんと一緒にいたいんですー犬になって会話もできないなんて、たえられません！」

「「そつち!?!」」

神様と俊とで異口同音。それとも保健所に待ち受ける恐怖を知らないだけか？

「ワガママ言っていないで、戻るのよ!」

「嫌ですーっ!?!」

そう言っつて正太郎は横断歩道を駆けていった。

「お、おい待てよ正太郎！」

俊も慌てて青信号を渡る。

もう一度言わせてもらおう。

それは下校途中に起きた。

「俊さん！ 危ない！！」

横からすごい威圧感を感じたかと思えば、俊は正太郎に真正面から突き飛ばされていた。

小さいくせに怪力だから、俊は横断歩道を越えてコンビニの駐車場まで飛ばされる。

「いつ…てえ…っ、何すんだよ正太郎！」

そして俊は、その瞬間を見た。

右折してきたダンプカーが、正太郎の小さな身体を易々と撥ね飛ばした。

「正太郎ーっ！！」

正太郎の被っていた帽子が、ふわふわと飛んで血まみれの正太郎の身体に軟着陸した…。

霊文室。

報せを受けて駆けつけた俊ママが遺体にすがって泣き、俊は目を充血させながら唇を噛み締めていた。

(…これは、俺のせいなのか…？俺のせいで正太郎は…)

どのみち保健所に連れていかれば命はないが、まさかこんな最期になるとは思わなかった。

「…お気に召さないようね」

どこから入ってきたのか、神様が俊に呟いた。

「そんなに正太郎が死んだのが悲しい？」

「ああ」

俊は神様ではなく、なにもない宙に語りかけるように呟く。

「よく泣いて笑って怒って。トラブル続きだったけど。俺、一人っ子だったし、可愛い弟ができたみたいで少し嬉しかったんだ。そもそも、自分が拾った子犬が死んだら…」

ぐいっと、涙を拭って。

「…誰だって悲しむだろ？」

「…そうね…」

神様も俊ではなく、宙を見据えて呟いた。

「…ひとつだけ訊くわ」

「いや、いい。分かる。…幸せだった」

神様はちよつと瞠目した。

「今までが不幸だったわけじゃないけど、正太郎がいてくれて、楽しい日々を送れたのも事実だったんだ」

「……………」

俊さん、と呼ぶ声が耳について、離れない。

「…分かったわ」

「なにがですか」

「そこまで言うのだったら、正太郎を“人間”として“生き返らせ”て”あげる」

……………え？

「ええうそっ!?!」

「俊、あなたさっきから誰と喋ってるの?」

「か、神様と」

そう。神様、よろしくお願ひしたいところですが。

「そんなことできるんですか!？」

「あらだって、神に不可能はないわ。あはは、当たり前じゃない」

「だから無表情で笑うのはやめてください」

「で、どうするの？ 人間として生き返らせる？」

「……………」

俊は頷いた。正太郎は自分を庇って死んだんだ。このままじゃ正太郎に申し訳ない。

「…しょうがないわね…」

神様は正太郎の遺骸に近寄ると、魔法のステッキを彼に振りかざした。

「正太郎、貴方は我が身を呈してまで拾い主を助けた。その功を認めて、貴方を完全な人間にしてあげる。…目を覚まさない」

すると、俊の目にあり得ない変化が映し出された。

正太郎が光に包まれたかと思うと、尻尾が無くなり、耳が人間のそれになり、ダンプに跳ねられたときの傷が完全に癒えたのだ。

そして血色が良くなったかと思うと、ゆっくり…本当にゆっくり、目を開けた。

「…正太郎…？」

正太郎は目をこすると、近くで泣いている俊ママに手を伸ばした。

「お母さん…？ どうして泣いてるんですか？」

「だって…正ちゃんが死んで…、…え？」

生き返った正太郎を見て、俊ママは喜ぶより先に驚愕した。

「キヤー！ ゾンビー…！」

そして、目を回した。

「正太郎？」

「俊さん！」

正太郎は布を取り払うと、一目散に俊に駆け寄った。

「僕、人間になれたんですか？ なれたんですよね！？」

「ああ…ああ」

俊は目の前の出来事が信じられなくて、ただそれだけを呟いた。

よく泣いて笑って怒って。トラブル続きだったけど。

…可愛い弟みたいで、憎めないんだよな…。

「ふえ？」

「な、なに…」

正太郎は俊の胸から顔を離した。

「俊さんのダサイＴシャツ、涙と鼻水でぐちゃぐちゃになっちゃいました」

「ダサくて悪かったな…ってぎゃあーっ！」

まだ買ったばかりなのにー！

「まあ制服の前ボタンしめれば見えませんし大丈夫ですよね」

「そーいう問題じゃないー！」

かくして、晴れて人間となった正太郎と、俊の甘い同棲生活がスタートした。

「うおい甘い同棲生活ってなんだよ！？ 正太郎は居候！ そう居候！…！」

「俊さんてば照れないでくださいよ。僕は一生愛しぬきますよー」

「照れとらんわそれと愛しぬくなー！！」

賑やかな生活は、しばらく続きそうです。

了

子犬が我が家にやって来たっ！！（12）（後書き）

「變讀ありがとうございました。」

≡（——）≡

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9705j/>

子犬が我が家にやって来たっ!!

2010年10月9日01時09分発行